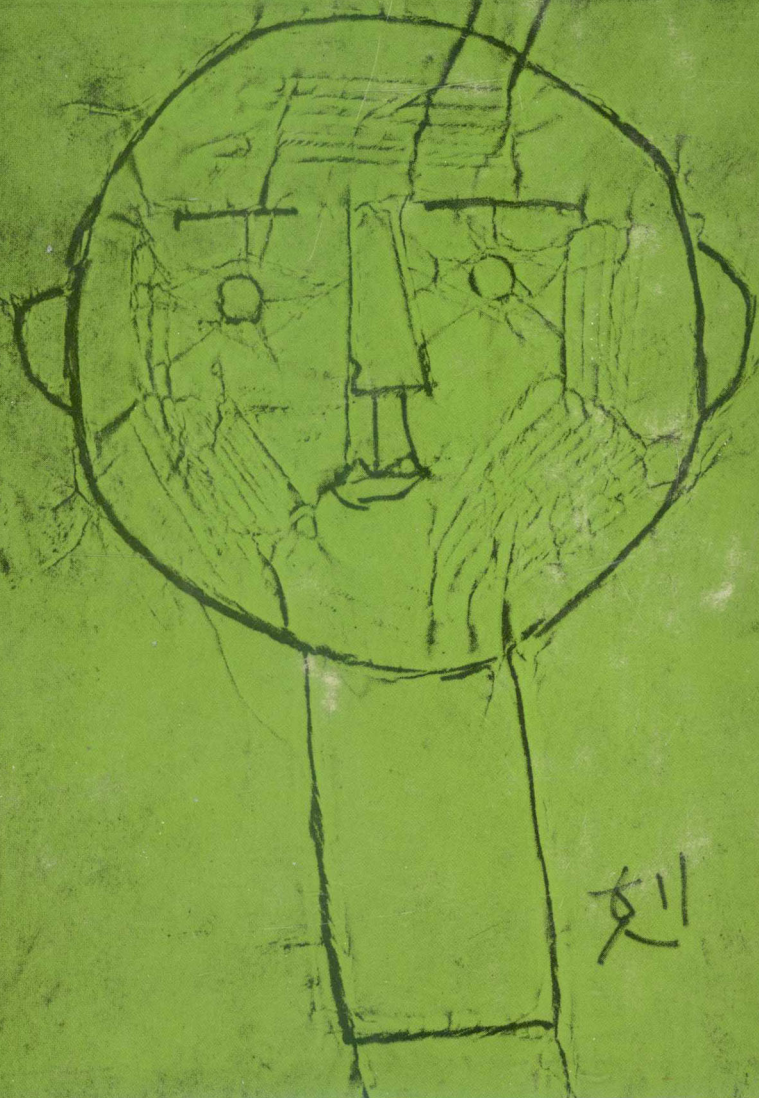


足立巻一 子ども詩人たち

詩はおしゃべりから…

理論社刊



足立巻一
子ども詩人たち
詩はおしゃべりから...

理論社刊



NDC 910 A5変型 20cm 316p

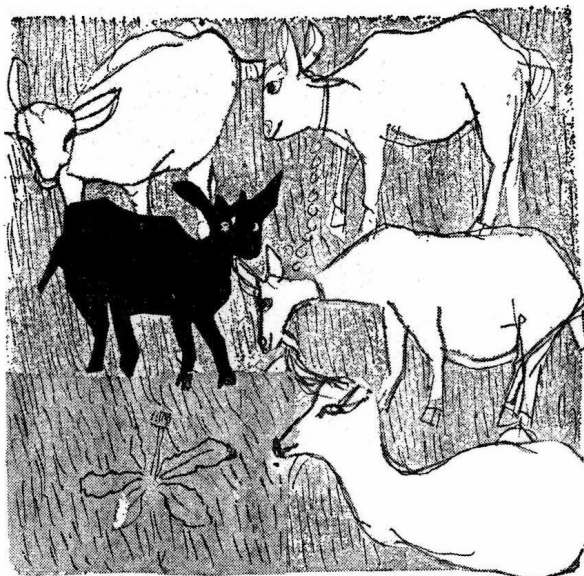
1972年初版 1979年改訂版初版 1092—32005—8924

著者 足立巻一（あだち・けんいち）

子ども詩人たち 1979年7月第三刷発行©

制作 小宮山量平 発行 山村光司 発行所 株式会社 理論社

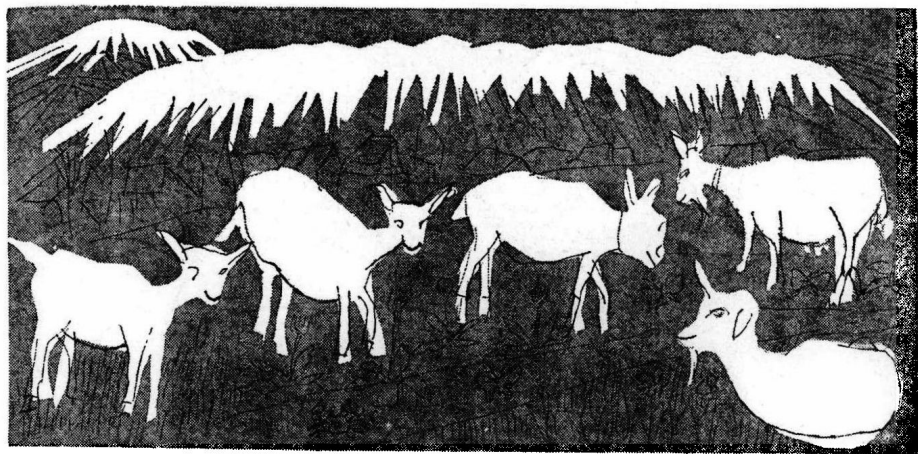
住所 東京都新宿区若松町 104 番地 電話 03(203)5791 振替口座東京9-95736



子ども詩人たち

詩はおしゃべりから……

もくじ



はじめのことばにかえて

子どもは変わったか？

5

第一部

詩はおしゃべりから：

19

A Ⅱ パパから生まれた

20

B Ⅱ かべのしたにかべがあつて

口頭詩のこと

28

C Ⅱ 詩はおしゃべりからはじまる

低学年の詩

42

D Ⅱ もっとナンセンスなうたを

71

E Ⅱ 遊びのうた

82

F Ⅱ 観察と発見と追求と

103

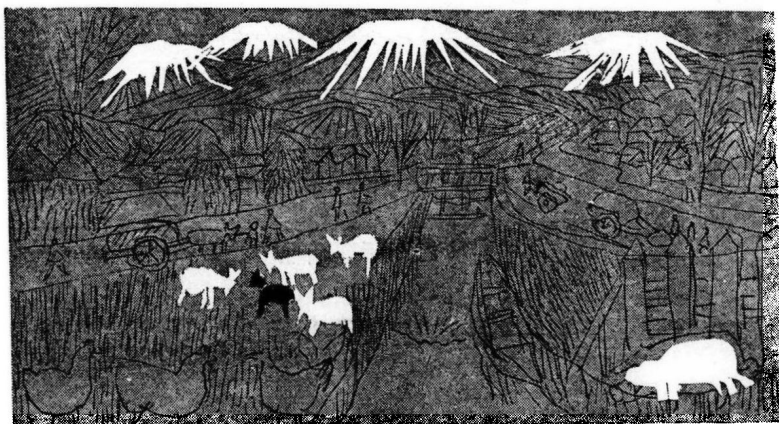
G Ⅱ おとうさんのくせ

愛情が詩を書かせる

124

H Ⅱ おかあさんのおちち

149



I || コトバ集めから日記や自伝へ

184

J || 高学年の詩はなぜつまらないか

201

K || 死ぬなんてばかだ!!

212

第II部

牛乳びんの歌

237

L || 牛乳びんの歌

238

M || ブラジルから帰ってきた剛介君

283

N || あるおかあさんの誕生祝い

301

O || 算数1が3になった
まちのすみっこで

308

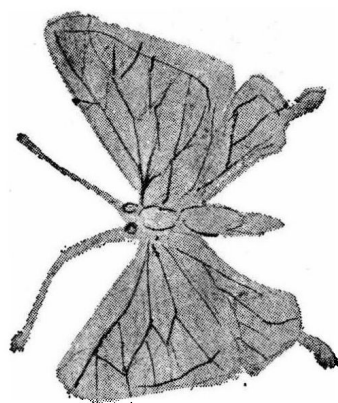
改訂版あとがき

314

本書は1972年理論社
『牛乳びんの歌』の
改題・改訂版です。

そうてい・カット
須田 剋太





子どもは変わったか？

——はじめのことばにかえて

この本を読んでくださるかたがたは、まず、引用されているたくさんの子どもの詩と作文とをゆくり読んでください。

それから、おもしろいなあと思った作品があれば、幼い子どもたちには読んでやり、文字の読める子には自分で読ませてください。作品の前後の叙述には、そのちに目をとおしていただいて結構なのです。それも、作品本位で気に入った章から読んでください。教科書のように第一ページから順序を追って読む必要ありません。一応、幼児の作品から高学年のそれへと向かうように配列してはありますが――。

この本は、何よりもわたしのすきなこどもの作品集なのです。アンソロジー（詩文選集）です。

この本には、『きりん』ということばがくりかえし出てきます。くどいと思われるかもしれませんが。

『きりん』は、まだ焼けあとが残っていた昭和二十三年（一九四八年）二月一日、大阪の尾崎書房から創刊された、こどもの詩・作文を中心とした雑誌です。発行者の尾崎橋郎（きょうろう）さんは戦争中は映画の助監督をしていた人ですが、戦後、大阪で出版業をはじめ、そのころ毎日新聞大阪本社の学芸部副部長だった井上靖さんに文化新聞の発刊を相談しますと、井上さんは「いまもっとも必要なのはこどものためのもっとも美しい雑誌だ」と説き、詩人の竹中郁さんを監修者に推し、そうして『きりん』の創刊となったのです。用紙は不足し、印刷技術もまだ回復してはいないころでしたが、井上さんがいう「もっとも美しい雑誌」を目ざし、表紙もさし絵も小磯良平・須田剋太・脇田和・吉原治良・小松益喜などの一流画家にお願ひし、多色刷りとしました。でも、この『きりん』は戦後の日本児童文学史に一つの業績を残しながらも、いろいろな事情があつて昭和三十七年四月、通巻一六五号をもって大阪から東京の理論社に発行を移しました。そして、以後続刊されたのですが、昭和四十六年三巻、通巻二二〇号で休刊となりました。

わたしは『きりん』の創刊間もないころから、詩人坂本遼さんとともにずっと編集に加わりました。その二十数年のあいだ、こどもたちのおびただしい作品を読みつけましたし、『きりん』をつうじてたくさんのこどもや先生や両親と知りあい、それらは深くわたしのこころに刻みつけられました。わたしは児童文学を専門とする作家でも研究者でもありませんが、ひとりの人間として、自分のこころに深く刻みつけられた作品と人とを記録しようと願ひました。そうした願ひが、たくさんの人たちの助けによってひとまずまとまったのが、この本です。従つて、ここに掲げたこどもの作品は、ごく少数をのぞいて創刊以来の『きりん』に発表されたものです。

この本は『牛乳びんの歌——“きりん”のこども詩人たち』と題し、昭和四十七年二月に理論社から刊行され、このたび改題改訂することになり、何度か読みかえてみておどろいたことがあります。こどもの作品そのものが、すこしも色あせていないことです。それどころか、以前よりもさらにかがやきを増したようにさえ感じられました。

もちろん、作品にあらわれた風俗の移り変わりはあります。しかし、どの作品でも、こどものころは風俗をつきぬけたところで光っているように思われます。大体において、こどもの作品は古典のように時間を越えるものではないでしょうか？

そのことは、戦争中のこどもの詩を発掘採集した桑島玄二・櫻本富雄共編『つばめの教室』（理論社）を読んでも、最初に強く感じられる事実です。例をあげてみましょう。

タンク*一年 木村タイゾウ

ヒトシハ マケソウニ ナルト、

「タンク ダ」ト イッテ

ミズガメノ ナカニ ハイル。

キカンジュウデ、パン パントウツ。

ボクハ シカタガナイカラ

「テンノウヘイカ パンザイ」ト イッテ

ザイモクノウエデ シヌ。

「タンク」とは戦車のことです。「ヒトシ」は、おそらく弟の名でしょう。この一年生の男の子は弟と戦争ごっこをしています。弟はタンクになって水がめのなかにはいり、機関銃を射つので勝てず、「天皇陛下万歳」といって戦死のまねをします。

これはいかにも戦争中らしい戦争ごっこ詩です。当時、兵士は戦死するときは「天皇陛下万歳」と叫ぶといいふらされ、こどももそのまねをしたのでしょうが、そこには滑稽でしかも悲しい気分さえ感じられます。すこしも勇ましくはありません。こどもは一心に遊ぶことによって、多くの人たちが「シカタガナイカラ」戦死していった時代の真実を自然にうっしだしているともいえましょう。でも、くりかえして読めば、戦争の背景はうすれて、ひたすら遊ぶこどもの姿だけが印象に残ります。

この「タンク」を「E」遊びのうた」の「土人ごっこ」（八三ページ）と、くらべてみてください。「土人ごっこ」は戦後、ターザンが流行したころの作品で、「タンク」の戦争ごっこは遊びの中味はまるきりちがいます。それに「タンク」が幼い兄弟ふたりだけの遊びであるのに対して、「土人ごっこ」は六年生を中心にした四人の遊びだという差異もあります。でも、どちらも進退きわまるまでにひたすらに遊んでいることは同じです。それには戦争中も戦後もありますまい。あるいは、こどもがひたすらに遊ぶ生きものだということは大むかしから変わらないのでしょうか。

後白河法皇が編んだといわれる平安時代の歌謡集『梁塵秘抄』には、よく知られた遊女の歌が収められています。

遊びをせんとや生れけむ

戯れせんとや生れけん

遊ぶ子供の声聞けば

我が身さへこそゆるがるれ

「遊びをせんとや生れけむ」とはなんと見事なこどもの本然をとらえたことばかと感心します。まったく、こどもは遊ぶために、遊戯するために生まれてきたようなもので、どんな幼い子でも、どんなところに置かれても必ず遊びを見つけたし、遊びにひたります。そのこどもの本然が、『梁塵秘抄』や

「タンク」「土人ごっこ」をつらぬいていると思います。そして、こどもの歌も踊りも遊びから生まれたように、詩もまた遊びから生まれるのです。もし、いまのこどもが何かにつけて衰弱しているとすれば、遊びそのものが衰弱しているからでしょう。

そうはいっても、こどもの全生活が遊びであるわけがありません。

家の仕事の手伝いや子もりなどが、子どもに課せられます。こどもにとっておもしろいはずがありません。

やはり『つばめの教室』に「アッカダマシ」という子もりをする詩があります。

アッカダマシ*一年 伊藤四郎

イマハ イソガシイノデ、

ガッコウ カエルト

マイニチ アッカダマシ シル。

アッカヲ ブウト

ヨドヲダスノデ、

クビネヘ ヨドマイカケヲ カケテ アソビニ イク。

ソイデモ アッカハ ヨドヲ ダス。

ヨドガ マイカケヲ ツタッテ、

セナカン ナカ ボチヨ ボチヨオチル。

ソンデ カゼガ アタルト サムク ナル。

ソンデモ

アッカヲ ダマサント

イネコキ オクレルデ ツライ。

「アッカダマシ」は子もり、「ヨド」はヨダレの方言です。赤児を「アッカ」と呼ぶ地方は山形県・静岡県・愛知県の一部だと辞書に出っていますが、「アッカダマシ」というのは方言辞典にも見えませんから、もう消えた特別なことばだったかもしれません。でも、子もりする要点は赤児をだますことにあるのですから、なかなかうがった言いかただと思います。まあ、それはともかく、よだれが背なかのなかに垂れ、風があたると寒いというところ、まことに実感にあふれた表現になっています。それとともに、これが戦争中に書かれた詩だとは、だれもが思いつかないでしょう。ここには、収穫で忙しい東北地方の農村の生活があっても、戦争を特に感じさせるものはありません。

わたしはこの詩を読むと、戦後まもないころ、堺の漁民の子が作った詩を思い出します。

かいむき * 堺市出島小学校五年 鞆 房子

朝 四時におきて

母とふたりで かいむきをした

赤ちゃんがしくしくなきでした

母は「もっと寝え」といって

赤ちゃんの頭をたたいた

お金があったらな

しばひろい * 同

赤ちゃんを おんぶして

母が涙へしばをひろいにいく

赤ちゃんが早く大きくなったらな

私が男だったらな

石をけりけりついていった

これらの詩は、昭和二十七年に書かれました。いまは堺臨海工業地帯になっていますが、堺市出島というところには古い漁師町があり、男たちは大阪湾の底から赤貝という貝をとり、女たちはそれを暗いうちから起きて貝から肉質をとり出し、市場へ運んでいました。そういう暮らしのなかで書かれた作品です。

生活の苦しさからいえば、「アッカダマシ」より「かいむき」のほうがひどいでしょう。しかしながら、「イネコキ オクレルデ ツライ」と書き、「お金があったらな」とつぶやいてはいても、この二編には共通して、絶望しきっているようすが感じられません。生活はつらいけれど、けっしてへこたれていません。戦中と戦後といううちがいもありません。

へこたれないどころか、「かいむき」の作者は、こんな美しい詩も書いています。

停電 * 同

停電の夜

あんな ところに

トタンのあな

星のようだ

出島は昭和二十年七月の空襲で一軒のこらず焼けてしまい、人びとはバラックを建てて住んでいました。「かいむき」の作者の家も、三畳と四畳半の二間^{ふたまた}しかなく、そこで六人の家族が暮らしていま

子どもは変わったか？

した。屋根はトタンで、それも昭和二十五年のジェーン台風で吹きとばされ、やっと修繕がすんだ夜に作られたのが「停電」の詩でした。悲惨に打ちひしがれるどころか、トタンの穴を停電のおかげで発見し、それを「星のようだ」とたのしんでさえ、いるのです。

わたしは、この詩の美しさよりも、そこにあらわれたこどもの途方もない楽天性そのものにおどろきます。これでは、へこたれるわけがありません。その無限といってもいいようなこどもの楽天性を、戦中と戦後とにまったく違った環境で書かれた、べつべつの子どもの詩にみとめることができます。なお、堺の少女のことは『詩のアルバム』で書きました。

また、このことは「KⅡ死ぬなんてばかだ!!」の章でくわしく書いたのですが、この楽天性にあらわれるこどもの強靱な生命力こそ、わたしが『きりん』で学んだ最大の教訓でした。わたしはこの生命力を謳歌し信仰して『きりん』の仕事をつづけたといってもいいでしょう。ところが、そのうち小学生の自殺もあらわれ、自殺年齢はさがるいっぽうです。でも、わたしは年来の主張を改めようとは思いません。それは何かのまちがいであるか、教育の荒廃のためか、そのどちらかかによるとしか思われませんので――。

こどもは、むかしもいまも動物がすきです。

『つばめの教室』に、こんな詩があります。

ウシ*一年 奥山 淳^{じゅん}

ウシノ ツノガ トレテ、

ウシハ シタ ムイテ、ナミダ タラシテ イタ。

トラククト ブッカッタン ダッテ

モウ アバレナイデ

ジット シテ

ナイタ。

この一年生は、特別に動物がすきだと書いてあるわけではありません。しかし、この詩の抑制された描写には、トラククトにふつかつて角が折れて鳴く牛への深いいたわりのところがこもっています。これを純粹な愛情と呼んでもいいでしょう。また、戦争中に書かれたということですが、戦争の影はまったく感じられません。

これを読むと、『きりん』に牛の作文ばかりを寄せた、牛きちがいといわれた少年のことが思いあわせられます。

そこは、大阪府岸和田市の山滝という小学校でした。岸和田市といっても葛城山脈かつらぎのふもとの山村です。少年の名を沢正彦君といいます。沢君のおとうさんは三歳のときに南方の島で戦死し、おかあさんの故郷のその村で暮らすようになったのです。そして、世話になっておじさんの家の牛を小学四年生のときから飼うようになり、牛飼いは中学校を卒業するまでつづきました。はじめは三頭だったのが六頭になり、七年間に二十頭以上もの牛を飼ったそうです。子牛をそだて、大きくなると売るのです。

そのうち、沢君は自分でも牛きちがいというように、寝てもさめても話すことは牛のことばかりですし、作文にも牛のことのほかはほとんど書きませんでした。その作文もけっしてじょうずな文章ではなく、むしろ、語法のあやまったところがあり、むちゃくちゃな表現も見受けられます。それでいて読む人のところを打つのです。

「牛日記」の一節を抜いてみましょう。

*

きのう、そうじをすると、くそばっかしで、（すくえませんが）すくられませんでした。いたでとりました。あれですくったら、おちるさかい、（おで）手ですくってとりました。くそをつかんだ手をあらうと、たいへんうつくしくなります。

*

ぼくが、牛のしたにさわると、にゆるにゆるです。牛のしたと、ぼくのしたと、（ひっぱりつくと）へんばりつけると、にゆるにゆるで、（きもち）ここらわるそうだった。

*

牛がびょうきになった。かずまきくんとこの牛より、まだえらいびょうきになった。ぼくが牛ごやにはいって、牛の足をわらでこすっちゃったら、なみだが心の中でないています。

このように牛の糞（糞）を手ですくい、牛とキスもするのです。牛が病気になる、一睡もしないで介抱（かいはう）したということです。「なみだが心の中でないています」という表現は語法にはかかっておりませんが、その悲しみを充分にあらわしています。

沢君が中学校を卒業するころ、その村でも牛は機械にかわり、牛を飼うこともなくなりました。その時分、わたしは沢君に会ったことがあります。そのことは『詩のアルバム』という本に書きましたが、当時沢君は大阪で精密機械をつくる工員になっていて、自分の作る機械は絶対に狂いがこないと自慢し、家では小鳥をたくさん飼っていると話しました。沢君が牛飼いで示した純粹で強烈な愛情は、いまでは機械や小鳥に向けられているようでした。そのさわやかな印象を忘れることができません。沢君の山滝地区ではもう牛飼いはすたれたかもしれませんが、全国ではまだ牛を飼うところも多く、